いじめ問題に関する一考察

熊本市教育委員会事務局 指導主事
田中慎一朗

はじめに

いじめを根絶したいという想いはすべての人間が持っている。しかしながら、そういう動きが社会の中で始まって久しいものの、依然として深く傷を負い、時には死を迎えようする子どもまでがいる。「いじめをノックアウト」という番組は、そういった問題と真剣に向き合い、様々な角度で子どもたちを支え、社会を動かしていると、番組出演を通してさらに感じることができた。甚だ、一方的な見地で、客観性にも乏しいものではあるが、番組制作の一助となればと、いじめに関する私個人の考えをまとめてみることにした。

子どもたちを取り巻く現状

個人的には、いじめがないクラスなんて世界中どこにもないと考えている。それは、大人の社会であっても同様で、精神的苦痛を感じている人間は、会社の中にも存在する。そう考えると、いじめ発生をゼロにすることは難しいかもしれない。（※しかしながら、ゼロに近づける取組は、社会や学校現場で続けるべきである。）だとすれば、学校が最も変わらなければならないのは、その受け止めである。子どもたちが、大人や第三者に相談することは、大きな障壁（親に心配をかける、学校で大事件とされる、いじめの二次被害を受ける、自分は立場が弱い人間とラベリングされる、etc）を乗り越えた末でのことと認識すべきである。訴えの種類や質に関係することなく、子どもたちのすべての想いに耳を傾けるべきである。しかし、そういった姿勢は、残念ながらすべての学校に整っているとはいえない。また、受け止める側の教員の意識改革も必要な現状である。

※ いじめ発生をゼロに近づける取組

いじめをゼロにすることは、非常に困難である。子どもが抱えるストレス（虐待、親のメンタルヘルス、自らの進路など、種類を問わない）は、非常に多く、昔に比べ少なくなっているとは思えない。ストレスがある一定量超えると、人は様々な反応を外に出す。攻撃性として、自らの内なるストレスに対処しようとしたものの一つがいじめである。安心安全で、それぞれが自己有用感に満ちた集団では、他者を攻撃する意味がない。ここで難しいのが、仮に学校現場が、最大限の努力をし、工夫して教室をそのようにしたとしても、いじめは起こるということである。先にも書いた通り、いじめの原因は、ストレスである。そのストレスが、家庭環境から絶え間無く出てくる子どもであったら、その子から発生するストレスを減らすことは、学校には不可能である。ストレスを抱えたまま、その子は毎日教室に通ってくるのである。

しかしながら、ここで諦めたら終わりである。いじめ根絶に向けた取組は、視点を変えれば可能となる。大きく分けると２つの視点がある。一つ目は、ストレスを受けた子。いわゆる、いじめっ子になる因子を持つ子どもへの支援である。これも想いを受け止めるという立ち位置が、教員に求められる。彼が受けているストレスに共感し、つらい想いをしているという事実を勝手な教員フィルターを通さずに見ることである。孤立と孤独は子どもたちを追い詰める。孤立と孤独には「人」が必要で、家庭内にその「人」を見込めない場合は、唯一

の「人」が教員であるという認識を持つべきである。具体的には、クラスの子どもそれぞれのストレスリスクをピックアップし、リスクレベルを可視化するといった取組も考えられる。ここで間違ってはいけないのが、可視化することを目的にしてはいけないということである。可視化は、手段である。学校内外で発生するストレスを抱える子どもを、いち早く察知し、その子に寄り添うことを目的としたものである。そうすることで、いち早くスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにつなぐことも可能になってくる。こうすることで、ストレスを抱えているが、その子がそのストレスを胸の内に抱きながらも他者への攻撃という形でのいじめを発生させなくても済むようになる。

二つ目は、人に視点をおいたいじめ予防的教室環境づくりである。事後対応も早期対応も、いじめの兆候を察知してからの対処となる。当然のことではあるが、いじめの早期発見に向けた取組は必要である。しかし、ここではさらに進んだ、予防に向けた取り組みを提案する。例えば、「なんか体がだるい、明日は部活の試合なので早めに寝よう。」これも予防である。しかし、私がここでいう予防は、さらに一歩進んだもので、「日頃から早寝早起きを心がけて、だるいと感じないような体づくりをしよう。」というものである。いじめを相談することを肯定的に捉える集団づくりやクラスメイトに関心（監視と関心を履き違えている場合がある）を持つ集団づくり等が考えられる。いじめを受けた本人ではなく、第三者であるクラスメイトがそれを発見した場合、すぐに誰かに相談できる体制作りも、いじめ発生前から行うことができる取組である。

以上、二つの視点は、いじめはどこにでも起こりうるものという認識の上に立った「いじめを起こさせない」ための予防的視点に立った取組の一例である。

いじめを相談されたら

いじめに関する相談で、大部分を占めるものは、いじめられている本人から来るものとそれを発見したものの、止められなかった子どもから来るものである。まず、発見した子どもからの相談で見落としがちなのは、相談者の心のケアである。相談をしに来たということは、自分の力でいじめを制止することができなかったからである。無力感に伴う自己肯定感が傷ついている子どもかもしれないという見方が必要である。まずは、教えてくれたことの感謝の気持ちを伝え、共に解決していくことを伝えるべきである。共に解決して行くというのは、常に何かを一緒にするといったことではない、「クラスメイトのつらい思いをあなたのフィルターを通して、私に伝えてくれる？」それだけで良いのである。そうすることで、その子どもは、いじめを許さないという立場に、今後立てるようになる。相談をして来た子どもは、集団に対する影響力の高い低いに関わらず、クラスの中でのいじめを解決して行く上でのキーパーソンに育つ可能性がある。そういった子どもを一人でも増やして行くことが必要である。

次に、いじめを受けている本人からの相談である。これは、絶対に見逃してはいけない。他者への相談、とりわけ、子どもから大人への相談は、障壁がかなり高いものである。さらに、その中でも高いのが、本人からの相談である。もしも、教員が学校現場で、いじめられていると本人から相談を受けた場合は、相当の覚悟を持って相談して来たと考えなければならない。また、もしもその受け止めを失敗すれば、その子どもは、二度と大人に相談しなくなる。すなわち、相談を受けた自分は、教員や大人社会の代表であると思わなければならない。ここで大切なのは、いじめであるかいじめではないかという判断ではない。

いじめであったら対応して、いじめでなかったら大丈夫なので対応しない。そこにはそういった危険性が隠れている。対応をしたくない、面倒臭いといった認識を持った教員がいたとすれば、いじめと認知しないという結果を生み、対応をしないことにつながるのである。このようにして、いじめは放置される。私は、いじめかいじめじゃないかは、後になって判断しても遅くないと考えている。つらい思いをして、心に不安を感じている子どもが目の前におり、その子自身が自ら助けてと訴えに来ている。それだけで、学校が対応する十分な理由ではなかろうか。その子にそのような状態に陥った原因があるかどうかという分析はいらない。原因がどこにあれ、つらいという思いを、勇気を持って相談して来た、その子の心をまずは受け止めるべきなのである。

背景をアセスメントする

いじめが発生したら、学校も保護者もいじめが起こってしまった原因を探しがちである。原因を究明し、責任はどこにあるのかを追求する。実は、これはあまり良い結果を生まない。いじめが発生した場合は、まずは現在進行中であるいじめをすぐに止めなければならない。当然、これは大切であるが、それと同時に再発防止に向けた動きをしなければ、終わったかのように思えたいじめは続くのである。学校現場で見かけるのが「あいつに関わったら面倒くさくなるからから打ち合うな」という解決方法である。いじめられる側の勘違いといったケースが存在するのは事実である。しかし、勘違いにせよ、心が傷ついているという状態を、関係者全員で理解しなければならないと考える。傷つけた側が、自分の行為について、心から向き合い、その行為のどこが相手を傷つけたか。なぜ、自分は、そういった行為をしたくなったのか、そのような部分に迫らないといじめた側の心は変わらない。原因を追求するというやり方では、犯人探しに帰結し、保護者は学校もしくはいじめをした子どもや親に責任を求めるといったことで終わってしまう。学校は心を育てる場所である。そうであるならば、起こったいじめの背景をアセスメントするべきである。鳥瞰的な視野で見つめるといじめを行った子どもの家庭環境や部活動等の状態、成績や進路、そういった要因も見えてくるかもしれない。いじめは何か単純な原因があって起こるものではない。必ずそこに背景があり、原因と見られていたものが、ただのきっかけに過ぎないということがよくある。いじめが発生した時、責任の所在をまずははっきりさせようとする動きがある。大切なことではあるが、まず一番にやらなくてはならないことは、子どもの心に寄り添い、今の状態をいじめられる前に戻していくことである。責任の所在を探している間に、子どもは傷つき、より深い傷を負っていく。子どもにとって、責任の所在などどうでも良いことなのかもしれない。彼らは「きついから、早く助けてくれ。この状態を変えてくれ。」ただ、率直にそう訴えているのではないだろうか。子どもの存在を忘れた、いじめ対応が存在する要因の一つに、原因、責任の追求を全面に捉えた対応があるのではなかろうか。

なぜ、訴えの受け止めができないか

いじめの学校内部での情報共有ができず、対応が遅れもしくはできずに、重篤化するケースがある。多くは、最初に相談を受けた教員の抱え込みによるものと相談を受けたことを報告したが、その報告を受けた人間が問題視しなかったことが原因である。では、なぜ抱え込むのであろう。いじめが発生したということが、教員の職務評価につながるのか。その答えは NO である。人事や給与を含め、評価に直接つながるものではない。むしろ積極的に認知し、対応に当たることの方が、一般的には評価が高い。しかしながら、認知に対し、積極性が感じられない場合がある。それは、人事や給与といっ

た物理的評価ではなく、心理的評価が関わっていると思われる。「自分の担任するクラスは、いじめが発生するクラスだ。担任としての力がないと周囲に思われる。」そう感じた場合、二つの判断が下される。

一つは、周囲に知られる前に自分だけで解決しようとするケースである。いじめは、多数の目を持って多面的に捉えることで、背景をアセスメントし、改善に向かわせていかなければならないものである。そうであるならば、どんなにベテラン教員であろうが、一人では解決できないといえる。ゆえに、このケースは、ベテランであっても起こりうるのである。一人でいじめ行為を止めることはできたとしても、解決には必ず複数の人間が必要である。この結果、解決できない再発するいじめが生まれ、また、一人で抱え込み対応したと思い込んでいる未対応のいじめが存在してしまうことになる。

二つ目は、そもそも「いじめは存在していない」と教員が自身に思い込ませるケースである。これは、最悪である。いじめを軽度のからかいと捉え、遊びの延長線上と言い聞かせる。いじめには背景があるがゆえ、様々な視点が存在しそれぞれの点からはいろんな見方ができる。教員にとって都合の良いその一点を取り、相談があった事案を眺める。その見方も事実であることには相違ないから、自分の見方や対応は、間違っていないと信じ込めるのである。ここで言えるのは、「訴えて来た子ども」を完全に無視しているということである。教員である自分を主語として「私はこう思う。」となるのである。「相談していた彼は、こう感じた。」という視点はそこにはない。

以上が、学校がいじめ訴えをいじめとして認知できない理由の一つであると考える。私は、先にも述べたとおり、いじめであってもなくても子どもが傷ついているのであれば、対応するのは教員として当たり前のことだと考える。また、対応する責任が教員にはある。しかし、そういった風土を生む背景として、昨今の学校批判や保護者からの過度の学校への要求などがあるのではなかろうか。原因や責任を明らかにする行為だけが先に行き、保護者やマスコミ対応も含め、それに過敏になり過ぎた学校が子どもを置き去りにした結果起こる悲劇である。子どものいじめ問題を語るときに、子どもの存在を忘れたくないものである。

学校現場の混乱

「いじめ」という言葉は、定義があって初めて使える言葉である。しかしながらこの「いじめ」という言葉ほど、定義が時代と共に変わった言葉はない。定義が変わるたびに、そこで議論される「いじめ」が変わる。しかし、おかしいのは学校現場の中で、保護者を交えながら対応をするとき、保護者ですら定義がバラバラであるということである。また、教員であっても定義がいつどのようにして何回変わったか、すぐさま言える人間が少ない。保護者であればなおさらであろう。学校現場は、このような皆の意識の中で定義がバラバラである言葉を用いて、議論をしているのである。

例えば、給食袋を家に置いたままずっと学校に持ってくるのを忘れた小学生の子どもがいたとする。同じ班のメンバーは、あまりにも忘れが続くので「お前いい加減にしろよ。次忘れたら一人で全部させるぞ！」と言った。その子どもが下校をしているのを見つけた、別の班員が「今日言われたこと覚えてるよな。本当に、させるからな！もしも、持ってこなっかたら口聞かないぞ！」と言った。これはいじめであろうか。班のメンバーが言ったのは、それぞれ１回だけ。いつもエプロン忘れのその子の分まで、班員は重い荷物を持って毎日仕事をしている。その子は、悪びれる様子もなく、エプロンを忘れる日々が続き、責任を感じていない。どうであろう。その子は、その日家に帰り、泣きながら母親に訴えた。「当番のリーダーに無視をすると言われた。給食当番を一人でさせられるかもしれないし、みんなが僕を見る目が怖い。」そう言いながら明日学校を休みたいと伝えて来た。母親は、困

り果て、次の日学校に、「自分の子どもをいじめた子たちに謝罪をさせること。給食当番のことでいじめをした二人の子どもに、息子と別の班に移ること。」を要求した。これは、いじめであろうか。今、これを読んでいる人の中には、「いじめである」と思った人もいれば「これはいじめとまでは言えない」と思った人もいるかもしれない。それこそが、定義がマチマチであることの証明である。ちなみに、国が定めるいじめ防対法では、これははっきりとしたいじめである。廊下を走っているクラスメイトを注意する行為も、注意を受けた子が苦痛に感じたのであれば、いじめであると明言している。

母親からの訴えがあった学校はすぐさま、学校いじめ防止等対策委員会を開き、対応を協議した。もしも、その子どもが、結果不登校になれば、法律が定める重大事態の２号事案になるという認識のもと、注意をした児童二人を呼び、言い方の指導を行い、その保護者を呼び、謝罪会を行うことと給食当番のメンバーを変えることを伝えた。すると、注意を行なった児童の保護者から、自分の子どもをいじめっ子扱いしたことへのクレームとそういった一方的な指導をする学校への不信感があらわになった。このようなことでは学校に任せられないといって、注意をした側の保護者から当事者同士の親による話し合いの提案があり、結果激しい双方の意見のぶつかり合いになってしまった。エプロンを持ってこなかった児童は、そのまま不登校になってしまった。学校は、双方の保護者からの信頼を大きく損ない。今現在も、不登校になった児童の保護者から、注意をした児童の出席停止を求められている。

このケースでは、学校はどうすればよかったのだろう。いじめ防対法は、滋賀県大津の事案からできた法律である。主旨は、子どもからのどんな小さなサインも見逃さないという意図で作られたものである。この法律に従い、国は基本方針を策定し、いじめ発生時の対応についても明記した。学校は、定義が変わってきたいじめという言葉に振り回されているところがある。法律の主旨を考えるのであれば、注意を受けた児童の心が傷ついたという部分を受け止めれば良いのではないか。「きつかったね。そう言われたんだ。そっか、みんなどうしてそんなこと言うんだろうね。」すると児童は、「僕が、エプロン持って来ないからかも。」と答えたかもしれない。「お母さん、何回も言うけど洗濯してくれないんだ。」と言うかもしれない。心のつらさを受け止めた上で、その背景に迫る。注意をした児童は、家で家事を毎日押し付けられ、嫌なことを自分にさせて毎日遊びに行く、そんな親を憎んでいたのかもしれない。そんな親の姿とエプロンを持って来ない彼が、重なって見えたのかもしれない。

もう一つの混乱も存在する。例えば、発達障害を抱えた子どもたち。その子を、担任の目から見るとからかってバカにしている言動が、クラスの子どもに見られた。気になった担任は、その子に確認をした。その子は「いつもみんなで遊んでいるから、別に嫌ではない。」と答えた。困った担任は、その保護者に状況を伝えた。保護者は、「遊んでもらっていると本人がそう感じているのだから、それが事実でしょう。」と答えた。クラスの中では、その後もそういった行為が終わることはなかった。クラスの別の子が、見ていてかわいそうと担任に訴えてきた。しかし、本人は「自分はいじられキャラで遊んでもらっている。」と認識している。保護者も本人も何もしないでくれと担任にお願いしている。これはどうだろう。あなたが、担任ならどうするか。法律で言えば、これは、本人が苦痛に感じていないので、いじめではないのである。ということは、学校は、法律では何も対応しなくても良いし、担任も周囲に報告する義務もない。

私は思う。対応すべきである。いじめであるかどうかなど関係ない。その子は、気づいていないかもしれないが、そうやって人を馬鹿にする行為は、してはいけないことである。そういった行為をしている子どもにそれを理解させなければならないし、そういった行為をしている子どもの保護者にも伝えるべきである。おそらく、その行為を行う背景にあるものが、その学級もしくはそれぞれの家庭

に存在するかもしれないから。

学校現場の混乱は、子どもにとってマイナス要因に働く。こういった混乱に対し、どうして行くかを学校だけでなく、保護者、社会、そして子どもたちの目で、共に考えていかなければならないと私は考える。

SOS を発しやすい風土づくり

長くなったが、いじめへの対応には発生後と発生前のもの二つがある。では、いじめを起こさせない、または、起こってもそこから学び集団が成長するためには、どのようにすれば良いのだろう。私は、一貫して子どもたちからの訴えを、受け付ける前から評価するのではなく、一旦きちんと受け止めることが大切であると考える。普段から、不平ばっかり言って協力性もないと感じている子どもから訴えは、軽く取られることもある。そういった学校の風土自体を変えていかなければならない。

子どもたちが SOS を出せるような、相談しやすいような風土にするためには三つの要因が、すべて揃わなければならない。一つは、受け止める皿が存在するということ。もう一つは、その皿の質が高いということ。最後に、SOS や相談をすると行った行為を集団が肯定的に捉えているということ。この三つの一つでも欠けてはいけないのである。

皿があるかどうかという部分では、アンケートや日記など SOS を出せる仕組みが存在するかを確認する。クラスの中になくても、学校としてそういった取組が存在するかどうか。自治体にあるかどうか。子どもたちがいる場所での、そのような皿は何に当たるかきちんと言えないようではだめである。皿の質の部分では、アンケートが書きやすいようになっているかどうか。書いたら最後、担任が大ごとにして勇気を持って記入した子どもの気持ちを無視する行動を取らないか。逆に、せっかくアンケートに書いたのに、そのアンケートは、担任だけが見て終わりにするものになっていて、子どもの訴えを共有するものになっていないかもしれない。皿の質が悪いと、子どもたちはそこで裏切られたと感じるのである。組織で対応することで皿の質を高める必要がある。三つ目の、相談という行為を、肯定的に捉える集団づくりは、相談に対する事例研修をクラスで行えば良いのかもしれない。当然、クラスで起こった事案については扱うことはできない。様々なところから、事例集が出されているので、その一つを例にあげながら、先生に相談があった部分からスタートして、どのようにすれば良いか、クラスで考えさせるのである。クラスの友だちとの様々な価値を共有しながら対話を通し問題解決した経験は、それぞれの問題に対して主体的に取り組む姿勢を生む。そうした子どもたちは、教員への相談に対して肯定的に捉えることができるようになるであろう。問題が発生することを怖れる集団ではなく、問題を解決して行くことに喜びを見出せる集団になるからである。

個人的な提案

・ 複数で対応

いじめには、背景がありその背景をアセスメントしないと解決へは向かわない。いじめは、多面的なものであり、その一部が目に見える現象として表れたものである。そう捉えると、一人で対応しても解決することはできない。それは、その人の能力の有無を言っているのではなく、そもそも、いじめは一人の教員では解決できないものであるという認識を持つことが必要である。ゆえに、いじめの相談を受けた時点で、その軽重を判断するのではなく、一旦受け止めることが必要でその受け止めをなるべく多くの教員と共有しなくてはならない。いじめやからかい事案に

ついては、必ず複数で対応することを基本としなければならない。

・ 学校外の専門職員や窓口を学校の中に置く

　様々な対策を講じても、いじめの訴えを受け止める最初の入り口が、だめだとどんない良いその先の教員が待っていてもつながらない。人が対応する以上、そのような失敗はゼロにはならない。教員としての視点では感じ取ることができないいじめも、この先発生する可能性もある。そこで私は、学校外に籍を置く教員ではない外部専門家（スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどを含む）を、学校内に置くことを提案する。そのいじめに関する外部専門家は、常に中立な立場で子どもと学校の間に立ち、子どもの気持ちを学校に伝え対応を促す役割を持つ。また、促すだけでなく、個々の対応に関する助言等も行う。１校に一人の配置が好ましいが、難しい場合は校区をまたがった形でも構わない。その人に連絡をすれば、きちんと学校につないでくれ、つなげるだけでなく責任持ってその後の対応にも助言という形で関わっていくと相談する側にも安心感が生まれる。今までの外部専門家と異なる部分は、学校に籍は置かないが学校組織の中に位置付けられ、学校に対し助言・監督ができる立場にあるという点である。例えば、所属を教育委員会にしてその教育委員会の出先機関という捉え方でも良い。

・ 対応をあらかじめ示す

　学校が、対応を間違う場合も想定される。いじめが発生した時、どのような対応をどのような手順で取って行くか、子どもや保護者、地域にあらかじめホームページや学校からの通信等を用いて示しておく。特に、小学生低学年の子どもにもしっかりわかりやすく伝えることが大切である。自らが取った相談するという態度が、正当であるということを示すことができ、その後の学校の対応を知っておくことで、違った場合に誰かに相談することが可能になる。子どもたちからの訴えは、何重にも重ねられた受け皿を用意して取りこぼしがないようにしなければならない。対応に違和感を感じた場合は、先に示した外部専門家が存在する場合は、そこに相談すれば良いことになる。それを受け取った外部専門家は、学校に対応の修正を促し、助言指導することができる。それは、あらかじめ取られるべき対応を示すことで効果を発揮する。

おわりに

　私自身、小学生の時いじめを受けた。死にたいと毎日考えていた。学校に行く前、家の神棚に手を合わせ、今日が無事であるように祈った。登校中のお地蔵さんにもお願いした。素通りすることはしなかった。なぜなら、いじめられたくなかったから。親にも相談できなかった。自分が弱い立場の人間であることを知られたくなかった。心配かけたくないという思いもあるが、弱い人間というラベルを貼られる方が怖かった。同様の理由で、友だちにも相談することはできなかった。神様だけが頼りだった。でも、いじめはお地蔵さんの前でも起った。

　中学に上がった私の前から、気がつけばいじめがなくなっていた。一度だけ、別の小学校から進級した友人に、「お前、小学校の時いじめられてたの？」と聞かれたことがあった。何気ないその言葉は、私を不安にさせ気持ちをどん底に落とすのには、十分であった。私は、二度とあんな嫌な思いはしたくないと勉強もスポーツもがんばった。人にも人一倍優しく接した。部活動では、県大会で賞状ももらうようになり、心も体つきも強くなった。高校に進学した私は、もっと強くなった。もっと人気者にもなった。大学でもさらに私は大きくなった。今でも思う。二度とあんま思いはしたくないと。いじめのおかげで強くなったのか、それとも、強くなったからいじめられなくなったのか。私にとっ

ては、別にどちらでもいい。私が思うのは、ただただ二度とあんな思いはしたくない。それだけである。

強くなることでいじめを克服した話をする人がいる。がんばれという人がいる。私は違うと思う。乗り越えたとしても、もっと強いストレスが来たらその人は倒れてしまう。私にも、さらに大きなストレスがくれば、やられてしまう。私には、仲間がいる。つらい時、話を聞いてくれる人がいる。いっしょに考えてくれる人がいる。私は、強くなっていじめを跳ね返したのではなく、その人たちのおかげで向き合うことができたのかもしれない。

何でも受け止めると、温室育ちになりたくましさを子どもたちは失うという人がいる。弱肉強食の中で手に入れたたくましさなどいらない。世界に目を移すと、そこは解決できない課題でいっぱいである。弱肉強食で解決できるものではない。共に知恵を出し合い、相手の痛みを知り主張を知る。そのようにして、私たちは世界を作るのである。その担い手になる子どもたち。もう一度言う。その子どもたちに、弱肉強食で手に入れた、たくましさなど不要である。子どもたちの声を受け止める。まずは、そこからスタートすれば良い。いじめ問題の解決は、とても簡単で、とても難しい。

2018年8月9日